



第 9 回

南瓜

くさ ま やよい
草間彌生

ガラス繊維強化プラスチック他 高さ200cm 1994年
香川県直島町 ベネッセホールディングス蔵(岡山県)

※「美術2・3」P96に掲載

自己消滅という自己表現

「南瓜」は不思議な作品である。具象でありながら抽象的であり、パターンの繰り返しは模様のようにも見える。大小の水玉が独特のリズムを生み出し、2色のシンプルきわまりない作品なのに、いつまでも見飽きることがない。

これを制作した草間彌生は、水玉に取り憑かれた作家である。この作品に限らず、彼女の作品の至るところに、無数の水玉がちりばめられている。

草間は、1929年に長野県松本市の旧家に生まれた。幼少時から、目の前に同じ模様のパターンが広がって見え、植物が話す言葉を聞くといった幻覚があった。彼女はその後「統合失調症」と診断されて、現在も治療を受けながら、精力的に制作を続けている。

通常であれば社会生活をさまたげる病の存在が、草間の制作には欠かせないものとなった。ある精神科医が彼女の作品を高く評価し、その後彼女は渡米して作品制作に勤しんだ。帰国してからもその創造性は衰えることを知らず、いまや草間は日本を代表する現代美術作家として国際的な評価も高い。

ならば、彼女には世界はどのように見えているのか。

「部屋じゅう、身体じゅう、全宇宙が赤い花の形で埋めつくされて、ついに私は消滅してしまう。そして、永遠の時の無限と、空間の絶対の中に、私は回帰し、還元されてしまう。これは幻でなく現実なのだ。私は心底から驚愕した。」(『無限の網 草間彌生自伝』)。

南瓜は彼女のお気に入りのモチー

フだ。どこかユーモラスな造形のこの野菜に、彼女は「宇宙」を封じ込める。彼女は自らの「症状」をきっかけに、水玉の視覚効果を発見した。水玉で埋め尽くされた空間は、平面でありながら無限の奥行きがあり、地と図の区別が曖昧な迷宮となって視線を巻き込み、視る側の主体すらも溶解させてしまう。彼女はそれを“自己消滅”と呼んでいる。それは幻覚の苦しさから逃れるための表現だった。

自己消滅という自己表現。言葉の上では矛盾だが、彼女にとって両者はひとつのものだ。それゆえ「南瓜」を観ることは、ひとを「鑑賞」という受け身の立場にとどめない。そのとき私たちは、すでに草間の「創造」のプロセスに招待されているのだ。

斎藤 環
さいとう・たまき

精神科医。1961年岩手県生まれ。筑波大学医学研究科博士課程修了(医学博士)。爽風会佐々木病院等を経て、筑波大学医学医療系社会精神保健学教授。思春期・青年期の精神病理、病跡学を専門とする。漫画・映画・サブカルチャー全般に通じ、新書から本格的な文芸・美術評論まで幅広く執筆。著書に『社会的ひきこもり—終わらない思春期』(PHP新書)、『アーティストは境界線上で踊る』(みすず書房)、『生き延びるためのラカン』(ちくま文庫)など多数。